

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第14巻 第2号



太田の大トチ

“太田の大トチ”は昭和39年に白峰村の天然記念物に指定されています。樹高25m、周囲13m、幹に大人が20人程はいることのできるほら穴があり、トチのなかでは日本有数の巨木です。この大トチは大道谷川の支流、太田谷の奥にあり、その付近はかつて出作りがさかんに営まれたところでした。また、“トチモチ”の名で知られるように、トチの実はかつて広く山村で利用され、山村の生活には大切な食料源でした。



加賀禪定道

半世紀ぶりに復活

中宮温泉スキー場からの白山山頂部。点線で示したのが加賀禪定道予定コース。



加賀禪定道（破線）と既存の登山道（点線）

加賀禪定道は鶴来町の白山本宮を起点として瀬戸野、中宮、尾添を通り、一里野からハライ谷、桧新宮を経て四塚山、大汝峰と登って行く道で、平安時代に開かれたといわれています。大正年間に廃道となり、昭和9年に一時復活しましたが、市ノ瀬からの登山道が整備されると通る人も少なくなり、道はほとんど消えてしまいました。

県では白山国立公園計画に基づく事業としてこの道を復活することとし、避難小屋や展望台も整備する予定です。完成まで4～5年を要することになりますが、早ければ来年の夏以降に通ることができそうです。室堂から一里野まで18kmある長い道ですが、天池あたりのお花畑や百四丈の滝など、見どころも多い道です。



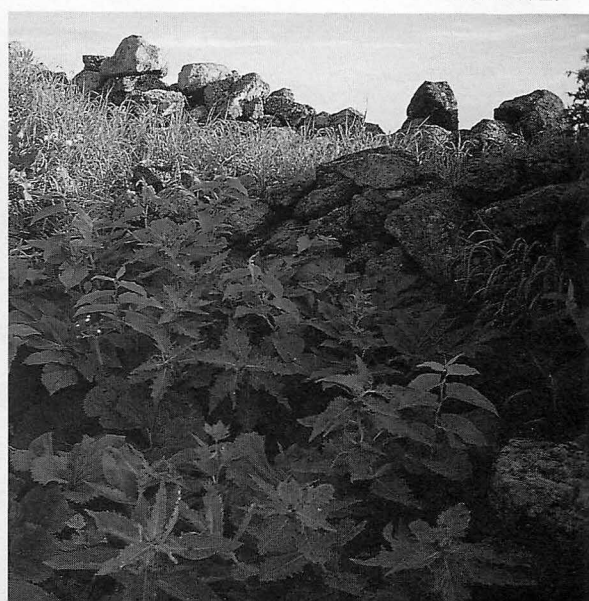
四塚山からの尾添尾根。加賀禪定道は、ほぼ稜線にそっている。



加賀室（天池室）跡（後方の山が四塚山）。

天池，後方の石垣は室跡。

室跡の石垣。





加賀禪定道からみる百四丈の滝
百四丈の滝は丸石谷上流の滝川にかかっている。後方の平坦面は清浄ヶ原。



加賀禪定道沿いは高山植物の
豊庫でもある。写真は天池付
近のニッコウキスゲの群落。



ほとんど昔の道を利用
して、登山道の整備が
進められている。四塚
山付近。

加賀禪定道の室

● 梶 典雅

加賀室はどこに？

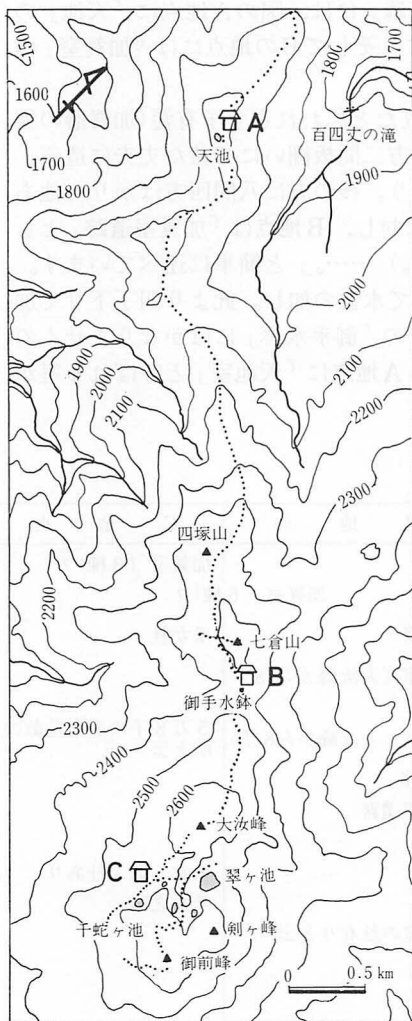
加賀禪定道の途中、天池の近くに昔の室の石垣が残っています。これは、一般的に「加賀室跡」と呼ばれています。1979年に筑波大学の千葉徳爾先生（現明治大学）が聞き取り調査をした『白山麓尾口村域の小地名』（白山自然保護センター研究報告第5集）には「加賀室堂」となっています。

天長9年(832年)に、加賀、越前、美濃の三馬場からそれぞれ頂上に向かって禪定道が開かれたと言われていますが、そのころに登拝者の宿泊施設として、各馬場が管理する室が建てられたと思われます。今の白山室堂がある所には「越前室」（または「御前室」）があり、「美濃室」

も文献にみえるのは後の時代ですが、やはり、御前峰の下にありました。「加賀室」はどこにあったのでしょうか。「加賀室」だけ頂上から遠く離れた天池の近くにあったのでしょうか。そうとは考えられません。そこで、いくつかの古文書等により、加賀禪定道の室がどこにあったかをみていくことにします。

平安時代の末期に書かれたと言われている『白山記』によると、長久年間(1040～1043年)に白山の爆発によって「加賀室」が岩で埋まったことが書かれています。この時の爆発は、比較的小規模な水蒸気爆発であったろうと推測されていますが、室にいた僧が傍の「采女」と名付けられた岩に隠れて、この爆発のようすを見ていたという記述があり、噴火口のひとつが翠ヶ池になったとされています。その後の時代のいくつかの文書には、千蛇ヶ池と大汝峰の間に「采女社（采女之宮）」があったことが記されていますので、平安末期の「加賀室」も、ほぼこの位置(図のC)にあったとみてよいのではないのでしょうか。なお、埋まった室のあたりに「堂五宇，室三字，造り改む。」とあるので、加賀馬場からの登拝者になくはならぬ室であったことがうかがい知れます。

『白山記』から戦国時代までは、室のことを書いた文献はあまりないようですが、室町末期に書かれたとされる『白山曼荼羅』によると、大汝峰下に加賀室と思われる室が、3棟づつ2列に描かれているそうです。



加賀禪定道沿いの室の位置

加賀室と天池室

江戸時代に入ると、宗教から離れた物見遊山的な白山登山が次第に多くなり、紀行文もいくつか残されて



います。江戸初期のものと言われている『北国白山天領御絵図』には、「加賀室」は大汝峰の麓の、「采女社」とは別の方向に描かれています。また、明暦年間（1655～1657）の成立とされる『白山惣絵図』には、大汝峰から四塚山の方向へ十八丁行った所に「加賀室」があるとされています。

次に寛政元年（1789年）に描かれたとされる『白山曼荼羅』には、図のA地点に「天池」の地名があり、「金劔宮」の文字と建物1棟が描かれています。そしてBの地点には「加賀室」の地名と建物1棟が描かれています。

ところが、1700年代末期ないし1800年代の初期に書かれたと思われる金子有斐（加賀藩の儒学者）の『白嶽図解』には、Aの地点を「天池室」とし「方二間板囲いにて甚だ丈夫に造る。三方は高き石垣にて風を防ぐ。前に二間四方ばかりの池あり。後の方に八間四方ばかりの池あり。此を天池と云。……。」とかなり詳しく書いているのに対し、B地点は「加賀室遺跡」として、「此辺地面平なり。此所五針松あり。（俗に禅定松と云。）……。」と簡単に述べています。また、「手水場」の項には「五尺ばかりの石天然と中くぼみて水盤の如し。此より四丁下りて加賀室の遺跡あり。」と書かれています。この「手水場」は今の「御手水鉢」にはかなりませんので、B地点にあった「加賀室」は1800年代にはなくなり、A地点に「天池室」と呼ばれる室があったことになるわけです。

加賀禅定道沿いの室の名の変遷

年 代	文 献	A 地 点	B 地 点	C 地 点
1042年（長久3）？ 1500年代？	白山記 白山曼荼羅			加賀室（3棟）？ 加賀室（6棟）？
1600年代前半？	北国白山天領御絵図		加賀室？	采女社
1655～1657年（明暦）？	白山惣絵図		加賀室（大汝峰から18丁？）	
1600年代後半？	白山紀行		加賀室（大汝峰から8丁）	5万8千の采女遊戯の所と云
1789年（寛政元）	白山曼荼羅	天池金劔宮	加賀室	
1700年代末期～1800年代初期？	白嶽図解	天 池 室	加賀室遺跡	
1818～1829年（文政）？	地理志稿	加賀室堂？		
1822年（文政5）	白山草木志			采女と云ふ社あり
1830年（天保元）	白山全上記			采女之宮
1850年（嘉永3）	白岳遊記	加 賀 室	加賀室の趾有りと云	
1860年（万延元）	白山紀行	加 賀 室 戸		
1862年（文久2）	又寝の夢物がたり	室堂立てり		

（A、B、C地点は前ページの図のA、B、Cに対応）



加賀室跡（天池室跡一図のA地点）全景

なぜこのようなことになったかを考えるには、白山の歴史を少しみてみる必要があります。室町後期の1543年（天文12年）に起った白山頂上の社殿造営をめぐる越前馬場と加賀馬場の争いは、越前・加賀両藩の争いに発展し、朝廷・幕府をも巻き込みました。この争論は1668年（寛文8年）に一応の結着をみます。江戸幕府は白山ろく18か村を直轄領とした上、白山を越前馬場平泉寺のものとしたわけです。これにより加賀馬場はさびれ、平泉寺一市ノ瀬一越前室と辿る越前禅定道が栄えたため、加賀室の必要性は次第に失われてしまったのでしょう。

天池室が加賀室に

しかし、加賀禅定道そのものは江戸後期にもよく使われていたことが次の紀行文などからも知ることができます。A地点の「天池室」はいつの間にか「加賀室」と呼ばれるようになり、やがて荒れはてていったようです。

文政年間（1818～1829年）の『地理志稿』には、白山東路として「木滑橋から瀬戸、中宮、尾添の各村を経て檜神社、加賀室堂、四塚、大汝山の6里22町48間」と記されています。嘉永3年（1850年）に金子有斐の二男、金子雋によって書かれた『白岳遊記』には、明らかにA地点と思われる所で「此辺より千丈瀑を少し見る。又上れば加賀室在り。」としており、B地点では、「大石在り。上凹み水を貯て早天に盡る事なし。左の方に加賀室の趾在りと云。」と書いています。また、金沢の俳人、後藤雲袋が万延元年（1860年）に著わした『白山紀行』によると、A地点をして「此室といふは、四面に高き石垣を周らして方丈の板屋往来の便りとなす。是を加賀室戸といふ。」と書いています。さらに文久2年（1862年）の『又寝の夢物がたり』（高村景寛）では、「……あま池といふ池あるかたへにかの室堂たてり。戸をあけて入見れば、雨もり雪たまりて小菴は朽果てつつ、二つある鍋はさびつきて物煮るべきすべもなし。」とあり、結局この人は越前室に泊まったことが記されています。

以上をまとめると、表のようになるかと思いますが、白山の支配権をめぐる大きな歴史の流れの中で、室の存否も揺れ動いたことがわかります。「天池室」を「加賀室」と呼んだのは、B地点の「加賀室」が廃絶してからですが、さびれゆく加賀馬場の人たちが意識的に、「加賀」の名を残そうとしたのかもしれません。それが、明治・大正時代を経て加賀禅定道が廃道化していく中で、「加賀室跡」の地名として残ったのではないのでしょうか。

本稿をまとめるにあたり、林正一氏編の『なかお特集号 ふるさとの山』及び久保信一氏編の『白山紀行』ほか数点の資料を参考にさせていただき、また両氏に御助言を賜りました。厚くお礼申し上げます。

〈自然保護課〉

白山山系の トリカブト属植物について

門 田 裕 一

南竜ヶ馬場，南竜山荘付近

トリカブト属 植物とは？

トリカブト属植物はキンポウゲ科に属し大部分が多年草で，北半球の温帯から寒帯にかけての地域に分布しています。形態的形質が可塑性に富んでいるためさまざまな環境に適応して自らの形を変えたり，また自然交雑が起こっていることが原因となって変異の幅がとても広いのが特徴です。

そしてそのために，分類が難しい，つまり自然のなかに存在する種を見つけ出すことが困難なことでよく知られた植物群です。トリカブト属は1年生の塊根をもついわゆるトリカブト類と，多年生の塊根をもつレイジンソウの仲間，そして日本にはありませんが1年草（つまり秋になると地下部も枯れてしまう）の種類もネパールやチベットに分布しています。矢毒として，また漢方薬の材料としても昔から有名です。中国では漬物として食用にするという話を中国の方から聞いたこともあります。経済植物として有用なのはいずれもトリカブト類（トリカブト亜属）であり，ここで御紹介するのもこの仲間です。

トリカブト類の花は，青紫色の花弁状の萼片5枚（かぶと状の上萼片×1＋円形の側萼片×2＋楕円形の下萼片×2）と1対の蜜弁（花弁），普通3－5個のめしべ，多数のおしべから成っています。このうち蜜弁は，げんぶ部，爪，そして距きよの3つの部分からできています（図1）。トリカブト類ではこうした花の各器官は構成は同じですが，種類によって形や大きさがさまざまに違ってきます。

トリカブトは自分が作った花粉を自分のめしべにつけて受精させることはできません（自家不和合性があるといえます）。花がよく目立ち，蜜弁の距に蜜が分泌されることから予想できるよ

うに花粉は昆虫達によって運ばれます。この昆虫とはマルハナバチというハチの仲間です。白山には、後で述べるように2種類以上のトリカブトが生育しているのですが、開花の時間にはほとんど違いがなく、またマルハナバチ類も特定の種類に好んで訪れるということがありません。このため花粉は異なる種から種へ運ばれることになり、雑種が生まれる下地は揃っています。

白山のトリカブト類

白山のトリカブト類としては、《ハクサントリカブト》とサンヨウブシが生育するとされてきました（ハクサントリカブトは普通の種と性格が異なるので括弧に入れることにします）。染色体の数からみると、前者は $2n=32$ の4倍で後者は $2n=16$ の2倍種です。このうちサンヨウブシは本州・四国に分布するやや珍しい種類ですが、白山地域では特に稀で、釈迦岳付近のみ採集されています。このサンヨウブシは分類が難しいトリカブト属にあっても、分類学でいうところの「良い種」、つまり形態的にはっきりと他の種と区別できる植物です。

ところが普通はこのようにいっても間違いはないのですが、白山周辺では少し様子が違ってきます。例えば金沢市東方の医王山へ秋に行ってみますと、奥医王山付近の登山道沿いにサンヨウブシによく似ていてそれとの区別に困るような4倍種（ $2n=32$ ）のトリカブトがはえていることに気づきます。後に述べますように、実はこのトリカブトに名前がついていなかったのです。このトリカブトと《ハクサントリカブト》が本小論の主題です。

南竜ヶ馬場のトリカブト群落

実際に白山でトリカブト類を見てみましょう。石川県側から登れば、砂防新道あるいは観光新道の2000 mを越える付近からあちこちに群落が見られ、南竜ヶ馬場付近にはかなり規模の大きい群落が見られます。岐阜県側からでは、大倉山避難小屋から室堂にかけてやはり大きな群落を見ることができます。また別山や三ノ峰でも晩夏に登山すれば、捜すまでもなく、特徴ある色と形ですぐそれとわかります。ここでは南竜ヶ馬場の群落を例にとって話を進めてみましょう。



南竜ヶ馬場のトリカブト群落

南竜ヶ馬場にある南竜山荘から別山に向かう登山道をほんの少し歩くと、手取川上流柳谷の源流を小さな橋で渡ります。河原に下りて明るい沢を少し上流に向かって歩いてみて下さい。時期が良ければ（8月中旬から9月上旬まで）、草原やまわりの灌木林にたくさんのトリカブトがはえていることに気がつくはずですが、草原の中には入らないようにして、河原から手が届く範囲で観察してみてください。

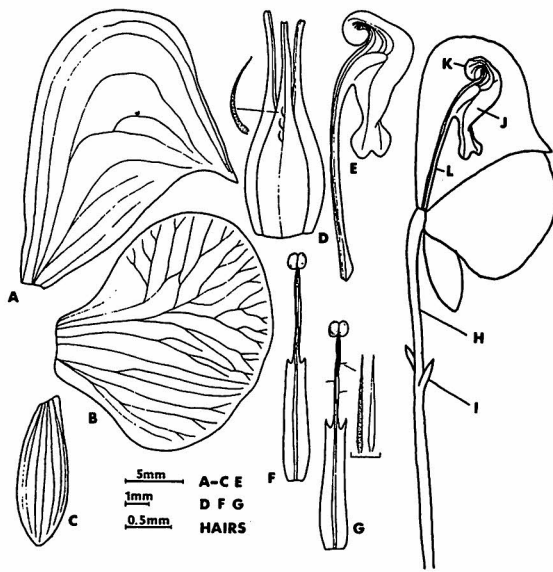


図1. トリカブトの花. A 上萼片(かぶと). B 側萼片. C 下萼片. D 雌蕊群(めしべ). E 蜜弁(花弁). F-G おしべ. H 花梗. I 小苞. J 蜜弁の脛部. K 蜜弁の距. L 蜜弁の爪

南竜ヶ馬場には3種類のトリカブトがある

南竜ヶ馬場のトリカブト属植物には、花の色、葉の切れ込み、大きさなどの性質には意味のある違いはみ

られません。次のような形質に重要な違いがみられます。図1に示したように花は柄の先についていますが、この柄を花梗といいます。トリカブトの花を手にとって花梗を観察してみてください。花によって毛(単細胞の曲がった毛)がはえているものと、全然毛がないものがあり、さらに一見毛がないようにみえても先端にわずかに毛がはえているものがあります(図2)。つまり花梗の毛の有無については変異があるのです。トリカブト属植物の分類においては花梗の毛の有無が重要な特徴の1つであることがわかっていますので、これまでの観察から次のような3つの形を区別することができます。

A型=花梗に全く毛がないもの。B型=花梗の全体にまんべんなく毛がはえているもの。C型=花梗はほとんど無毛ですが、中部から先端にかけてまばらに毛があるもの。次にかぶととそのなかにある1対の蜜弁(花弁)をみてください(図1)。かぶと蜜弁の形も植物個体によって微妙に違います。かなりの数を調べると、花梗の毛の性質とかぶと、蜜弁の形には相関関係のあることがわかります。これらの性質をまとめると次のようになります。

A型=花梗は全く無毛で、かぶとは僧帽形、かぶとのくちばしは短く、蜜弁の脛部はやや細くかつ長く、距は太く長い。

B型=花梗には全体に毛がはえ、かぶとは円錐形、かぶとのくちばしは長く水平方向に突出し、蜜弁の脛部は太く短く、距は細く短い。

C型=花梗はほとんど無毛だが中部以上にまばらに毛がはえ、かぶとや蜜弁の形はA型とB型の中間的性質をもつ。

南竜ヶ馬場のトリカブト類は互によく似ていますが、上記のように3型をまとめることは困難なことではありません。したがって次に検討することは、これらの3つがどのような種類にあたるかということです。

ミヤマトリカブトと
リョウハクトリカブト

A型が何にあたるかについては特に問題はありません。東北地方の飯豊連峰や朝日連峰、北アルプスの白馬岳付近にみられるミヤマトリカブトにあたります。ところがB型が何にあたるかという、あたるものがないのです。ここでは詳しいことは省略しますが、花梗に毛がなく、葉の切れ込みが浅い(三全裂あるいは三深裂しない)という特徴にもとづき、あてるとすればタカネトリカブトかハクバブシのどちらかが候補となる

のですが、そのどれとも違います。日本以外にもB型にあたるものはありません（現在までに知られていう限りではという条件はつきませんが）。したがって、B型は新植物となります。分類学的な検討の結果、タカネトリカブトに近縁であることがわかりましたので、その新亜種として別に正式の発表を行う予定です。ここでは、分布域が両白山地に偏ることから、リョウハクトリカブト（両白鳥兜）と仮に呼ぶことにします。（本当はこれをハクサントリカブトと呼びたいところですが、それは同じ名前が既に存在していますので不適当です）先に述べた、サンヨウブシに似た4倍種とはこのリョウハクトリカブトのことです。

図3はミヤマトリカブトとリョウハクトリカブトのかぶとと蜜弁の形の違いを示しています。このように両種は花梗の毛の有無そしてかぶとと蜜弁の形の違いから、確かにはっきりと区別できます。ここまでで南竜ヶ馬場のトリカブト群落はミヤマトリカブトとリョウハクトリカブトの2つから成っていることがこれで明らかになりました。それでは第3のC型はなんでしょう？

《ハクサントリカブト》の実態について

白山には、その名前を冠した《ハクサントリカブト》という植物があることは既に述べました。手元の植物図鑑を開いて見てみるとおわかりのように、主な図鑑には必ずその名前がでてくるほどよく知られたものです。C型と《ハクサントリカブト》との間にはどのような関係があるのでしょうか？

《ハクサントリカブト》は学名を *Aconitum hakusanense* といいます。学名は基準標本（タイプ）にもとづいていますが、このタイプは昭和14年8月9日に「加州白山」で採集された1枚の標本で、東京大学に納められています。この個体を詳しく観察すると、次のようなことがわかります。すなわち、花梗は中部以上にまばらに毛がはえ、かぶとはやや円錐形でくちばしは短く、

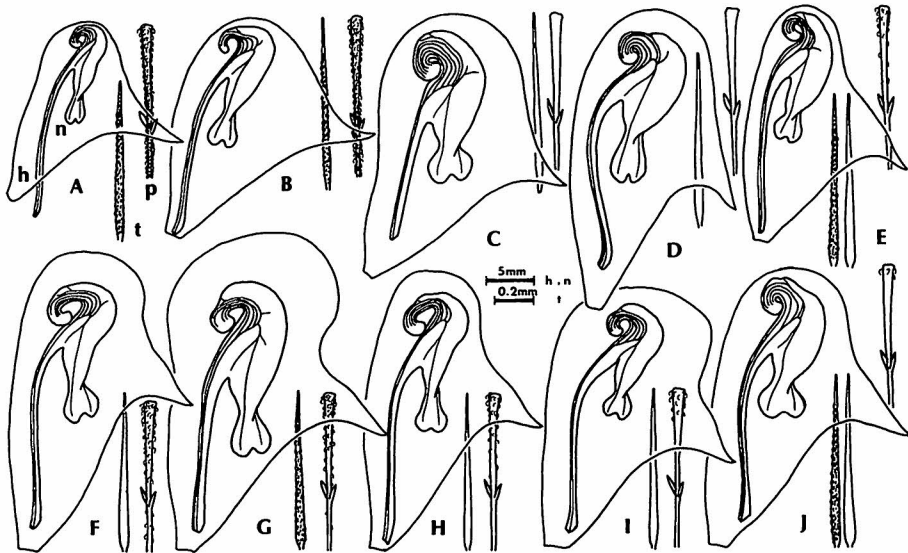


図2. 白山山系のトリカブト3種類の花の比較.

A—B リョウハクトリカブト (B型). C—D ミヤマトリカブト (A型).

E—J 《ハクサントリカブト》 (C型).

A 飯豊山地, 地神山. C 福井県経ヶ岳. 他はすべて白山南竜ヶ馬場.

h かぶと. n 蜜弁. t 側萼片の内側にはえる長毛. p 花梗の毛のはえ方についての模式図.

蜜弁の脛部は長いが距は細くやや短いという特徴をもっています(図2)。つまりこの《ハクサントリカブト》のタイプは幅広い変異を示すC型に属し、ミヤマトリカブトとリョウハクトリカブトの中間的性質をもっているわけです(図3)。

ここでもう一度C型について検討してみることにします。図3に示したように、ミヤマトリカブトとリョウハクトリカブトははっきり区別できる別種であるといえます。したがって、C型はこれらの2種類の間に起こった自然交雑の結果生み出された雑種と考えるのが自然でしょう。(これは科学の方法論では仮説にあたるもので、さらに検証を行う必要があるのはいうまでもありません。)つまり、言い換えれば、《ハクサントリカブト》とはミヤマトリカブトとリョウハクトリカブトの雑種に与えられた名前ということが出来ます。花粉を染色するという方法で雑種と考えられるC型の稔性を調べますと、大部分が100%近い正常な値を示すことがわかっています。したがって、今もなお南竜ヶ馬場ではこれらの3つの植物の間で交雑が起こっているものと期待されます。花の時期に訪れるとマルハナバチ類が自由に飛び回って花粉をあちこちに運んでいることからこのことが予想されます。

白山山系におけるトリカブト群落の組成

このように南竜ヶ馬場のトリカブト群落はミヤマトリカブト、リョウハクトリカブトそして雑種《ハクサントリカブト》の3種類が生育していることが明らかになりました。それでは南竜ヶ馬場以外の他の群落ではどうでしょうか? 図4に調査の結果をまとめました。ミヤマトリカブトは白山の高山帯にのみみられ、個体数も他の種類に比べると非常に少ないことがわかります。逆に標高が低くなると今度はリョウハクトリカブトのみになりますが、ミヤマトリカブトとは異なり個体数は豊富です。そして標高の点で中間に位置する他の群落ではリョウハクトリカブトと《ハクサントリカブト》の混成となることがわかります。このことは次のことを意味していると考えられます。ミヤマトリカブトはもともと高山性のトリカブト属植物であり、白山は日本で高山帯が成立する西限にあたっていることと深く関連して、白山地域がこの種の分布域の西の限界となっています。生物の種の分布域の限界では個体数が少なくなることはよく知られた事実です。これに対してリョウハクトリカブトの場合は、もともと垂直的には山地帯の種類であり、また白山が分布の中心となっているのですから、個体数が多いのも当然です。そして中位の標高

このように南竜ヶ馬場のトリカブト群落はミヤマトリカブト、リョウハクトリカブトそして雑種《ハクサントリカブト》の3種類が生育していることが明らかになりました。

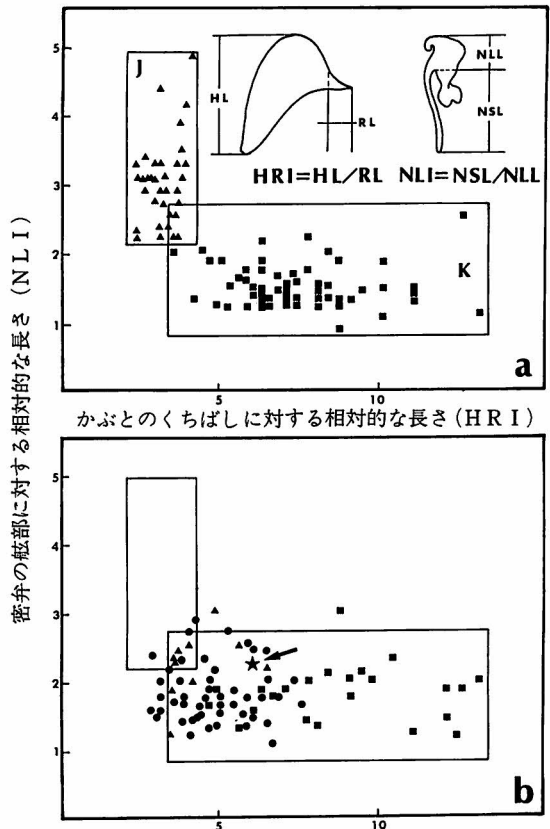
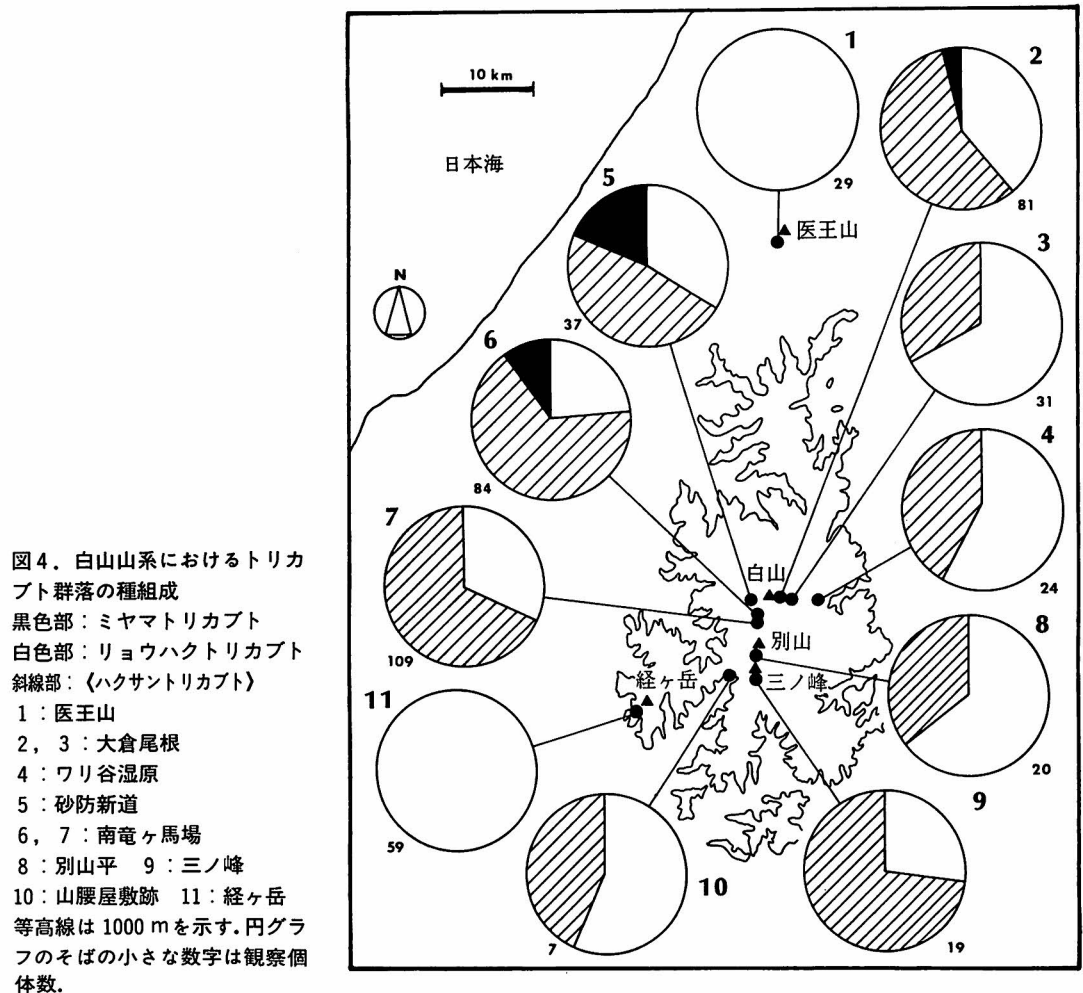


図3. 白山山系のトリカブト3種類のかぶとと蜜弁の比較. ▲ ミヤマトリカブト, ■ リョウハクトリカブト, ● 《ハクサントリカブト》, ★ 《ハクサントリカブト》のタイプ標本.
a 図 J 飯豊山地地神山, K 福井県経ヶ岳
b 図 白山南竜ヶ馬場.

の群落では、両者が接触して交雑を起こしていると考えられます。図4からこうしたことが読み取れます。

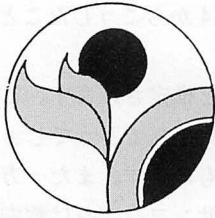
以上のように白山ではトリカブト属植物の自然交雑が進行中であると推定されます。このまま進むと、片親のミヤマトリカブトはいずれ消滅すると予想されますが、果たしてどうでしょうか？このように考えると、白山はそれ自体がまるで一つの実験場のようなものです。また一方ではこうした4倍種相互の活発な遺伝的交流とは一線を画しながら、2倍種サンヨウブシは釈迦岳付近にひっそりと生きているわけです。トリカブト属植物は経済植物として重要なだけでなく、生物学的研究の材料としても極めて興味深いものであることがおわかりいただけたでしょうか？

図2～4は国立科学博物館専報第19号(昭和61年12月出版)掲載予定論文からの転載であることをおことわりいたします。
(国立科学博物館植物研究部)



(図2～4は国立科学博物館専報第19号(昭和61年12月出版)掲載予定論文からの転載であることをおことわりいたします。)

<国立科学博物館植物研究部>

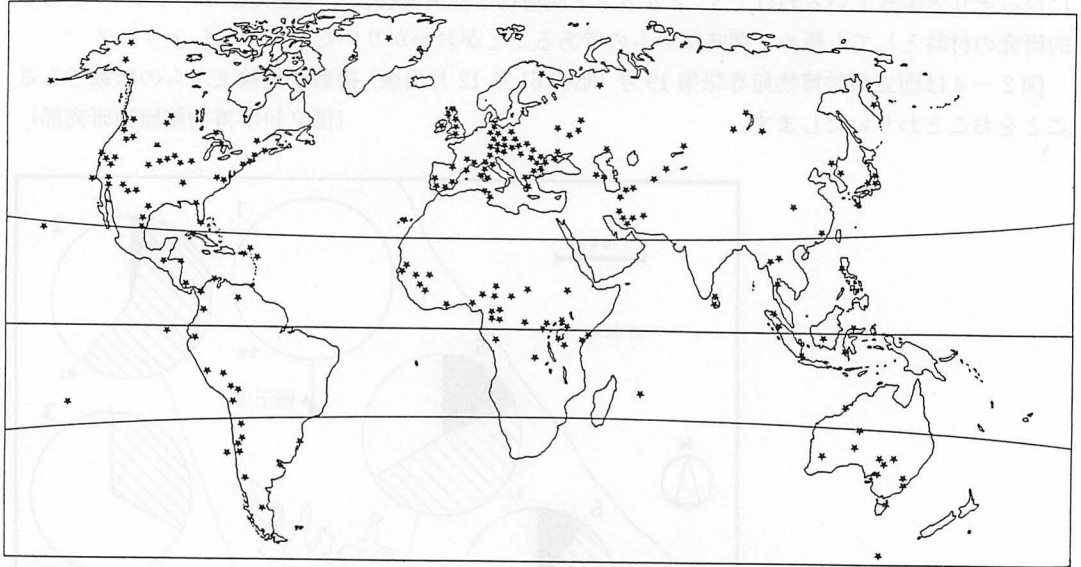


UNESCO

UNESCO



MAB



世界の生物圏保存地域（ユネスコのパンフレットより）

ユネスコから白山へ視察に

ユネスコから視察に

昭和61年7月16日から17日にかけて、環境庁白山国立公園管理官、伊藤淳一氏の世話により、ユネスコ（UNESCO、国連教育科学文化機構）のパリ本部から生態科学部長フォン・ドロステ博士（Dr. Bernd von Droste）が白山を訪れた。これは、ユネスコの生物圏保存地域に指定されている白山国立公園の教育・研究及び自然保全の実態などを視察に来たものであった。フランスから1週間の来日中、文部省、環境庁、国立公害研究所などで連絡調整のあと石川県入りした。日本ユネスコ国内委員でもある東京農業大学教授高井康生氏と文部省国際学術課川野由美子氏が同行された。

中宮温泉での第一夜は、白山の自然のビデオを見て雪景色に感動しながらの意見交換であった。17日には白山自然保護センター中宮展示館と野猿公園の見学、当センターで情報交換の懇談会、そして登山口である別当出合周辺でのブナ原生林の観察と忙しい視察であった。

野猿公園では、ほとんど連日ニホンザルのカムリA群が来ていた季節なのに、この日に限って待ってもサルが現れず、案内者はがっかり。しかしドロステ氏は「自由にならないのが自然だ。野生動物の観察にこのようなことはよくあること。」とさりと言っていた。

恐竜化石が発見されて話題となっている桑島の里へも立ち寄ったところ、ドロステ氏と

日本の生物圏保存地域

(地域名)	区 域	面積 (うち中心地域)
屋久島	霧島屋久国立公園屋久島団地及び屋久島原生自然環境保全地域の区域	19,000ha (7,000ha)
大台ヶ原・大峰山	吉野熊野国立公園大台ヶ原・大峰山団地の区域	36,000 (1,000)
白山	白山国立公園の区域	48,000 (18,000)
志賀高原	上信越高原国立公園志賀高原団地の区域	13,000 (1,000)

同じドイツ人、ライン博士が100年以上も前に白山へ研究に来ていたと聞いて感慨深そうであった。

別当出合ではブナ林の美しさをほめたたえる一方で、大規模な砂防工事が目についてしょうがないらしく、しきりに風景との調和や川すじの生態系の保護について質問していた。ヨーロッパ人には、狭いわが国のような国土保全のための砂防という考え方は理解しにくいらしく、しばしば顔をしかめていたのが印象に残っている。

生物圏保存地域

ユネスコは、1971年から「自然及び天然資源の合理的利用と保護に関する科学的研究を国際協力のもとに行うことにより、環境問題の解決の科学的基礎とする」ことを目的として、「人間と生物圏事業計画」を展開している。通称MAB計画 (Programme on Man And

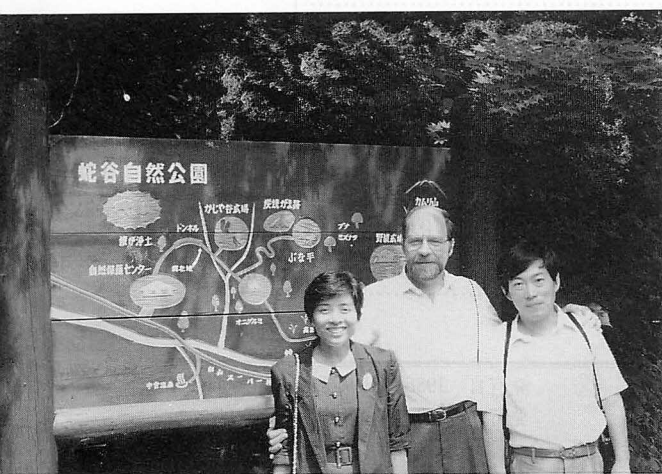
the Biosphere) と呼ばれ、約105カ国が参加している。

事業は14のプロジェクトから成り、その中の一つ「自然地域とその地域に存する遺伝物質の保護」では「現在及び将来の人類の利用に供するため、自然生態系における動植物の保護、その遺伝的多様性の保存をはかり、また当該地域を研究・教育・訓練の場として提供する」ことを目的とし、生物圏保存地域 (Biosphere Reserve) を指定している。現在まで世界の66カ国に252カ所が指定されていて、わが国では1981年2月に屋久島、大台ヶ原・大峰山、白山、志賀高原の4地域が指定されている。

白山で

白山地域ではこれまで、特にMAB計画に直結した事業は行なわれてきていない。またこの地域が指定されている事もあまり知られていなかったといつてよい。ユネスコは文部省、国立公園は環境庁という担当省庁のちがいがもこれまでにきわだった事業が持たれなかった原因の一つといえる。ドロステ氏もそのことには気がついていて、日本の保存地域では研究、教育そして地域管理がよく行なわれているという外交辞礼の一方で、保存地域のPRにも力を注いでほしいと要望していた。また、ユネスコで考えている「世界の指定地をネットワークで結び、情報交換や学術交流を進める」ことに協力、団結し、人口増大、自然破壊、食料問題など、地球レベルの環境保全の一役を担おうではないかと言い残して白山を去った。

(水野昭憲)



視察中のフォン・ドロステ博士 (中央)

たより

今年の白山の宿泊施設利用者は、室堂(5月1日~10月25日)で23,069人、南竜山荘・同野営場(7月1日~8月31日)で4,876人の合計27,945人、昨年と比較して約1,000人の減少となっています。市ノ瀬~別当出合間の一般車両通行止と、梅雨明けが例年より遅れたためでしょうか。市ノ瀬~別当出合間については、復旧工事が順調に進んでおり、来年の登山シーズンには一般供用される見通しです。

中宮展示館は11月9日で閉館です。カモシカをはじめとして野生動物を観察する施設、ブナオ山観察舎は11月20日に開館します。来年の5月20日まで年末年始と火・水曜日を除いてセンターの職員が駐在し、動物の解説や観察の指導を行っています。ぜひ、一度おでかけ下さい。

一般の登山者や地元から要望が強かった加賀禪定道が、半世紀ぶりに復活することになりました。昔は白山に登拝することを禪定といい、加賀禪定道はそのための代表的な登山道でした。コースは丸石谷と目附谷の間の稜線にほぼそっており、周辺の景色が十分に楽しめます。これから白山の代表的な登山コースとなってゆくでしょう。

加賀禪定道にはかつていくつかの室がありましたが、その室跡の名称については、長い年月を経ているためか、多少の混乱があるようです。榎典雅氏の「加賀禪定道の室」では、加賀禪定道沿いの室の位置と名称について、史料をもとに解説していただきました。

「白山山系のトリカブト属植物について」をご寄稿いただいた門田裕氏は、国立科学博物館植物研究部に所属しておられます。ここ数年、トリカブトの研究のため白山にいられていましたが、その研究成果をわかりやすく書いていただきました。

白山がユネスコの「生物圏保存地域」の一つに指定されていることは、あまり知られていません。今夏、ユネスコからドロステ博士が視察にこられ、その時のもようを「ユネスコから白山へ視察に」で紹介しました。

目 次

表紙 太田の大トチ	1
加賀禪定道半世紀ぶりに復活	2
加賀禪定道の室	榎 典雅 5
白山山系のトリカブト属植物について	門田裕 8
ユネスコから白山へ視察に	14

はくさん 第14巻 第2号(通巻60号)

発行日 1986年10月31日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂